

農林水産大臣賞受賞

シークワサー、山羊、山の3つの宝でむらおこし

受賞者 な ご し かつやましゅうらく 名護市勝山集落
おきなわけん な ご し
(沖縄県名護市)

■ 地域の沿革と概要

沖縄県名護市は、北緯26度35分、東経127度57分に位置し、沖縄県の総面積の約9.2%を占める本島北部最大の都市である。

気候は亜熱帯海洋性気候に属し、一年を通じ温暖であるが、夏季には台風の襲来も多く、冬季には強い季節風にさらされる地域でもある。標高300～400m級の多野岳、名護岳、久志岳等の山々と太平洋、東シナ海の2つの海に面し、市内の所々には田園地帯が残っていると同時に都市機能が集積する北部地域の中核都市となっている。

また、北部地域の玄関口として、中南部地域との道路ネットワークが整備されており、交通のアクセス性に優れた都市でもある。名護市では、これらの条件を活かした多種多様の農業が展開されており、主な作物の県内占有率を見ると、シークワサー32%、タンカン30%、みかん34%、パイナップル19%、輪ギク13%、サヤインゲン11%の県内シェアを占めており（平成18年度園芸・工芸作物市町村別統計書より）、さとうきびも本島北部地区で最も生産量が多く、鶏卵、ブロイラーの生産量、山羊の飼養頭数についても県内一を誇っている。

勝山地区は、名護市の西側に位置し、嘉津宇岳、古巣岳、八重岳、安和岳の山々に囲まれた集落である。海拔70mから240mほどの比較的高い台地や傾斜地にあり、山岳を背にした起伏の激しい地形に集落が形

第1図 位置図



※ 白地図 KenMap の地図画像を編集

第1表 地区の概要

事 項	内 容	
地区の規模	集落	
地区の性格	地縁的な集団等	
農 家 率 (内訳)		50.0%
	総世帯数	54戸
	農 家 数	27戸
販売農家数 (内訳)		27戸
	専業農家	15戸
	1種兼農家	7戸
	2種兼農家	5戸
主要作物 (農業産出額)	シークワサー	22.8(百万円)
	肉用牛	7.8(百万円)
	山羊	6.2(百万円)
農用地の状況 (内訳)	耕地計	29.8ha
	田	—
	畑	1.7ha
	樹園地	28.1ha
	耕地率	7.7%
	農家一戸当たり農用地面積	1.10ha

成されている。集落の総世帯は54戸、人口142名、うち農家世帯が27戸である（平成17年）。近年は、新たに市営団地が完成したこともあり、Uターン者も増加している。

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

勝山集落は嘉津宇岳や安和岳に囲まれた緑豊かな集落であり、昔から山間部でのシークワサー栽培が盛んな地域である。また、山野草のみでも飼養が可能なヒージャー（山羊）でも有名な地区であり、現在もシークワサーを核として、カーブチー等沖縄在来の柑橘類と山羊の複合経営農業が展開されている。

集落では、住民全員が参加している自治組織（勝山区）があり、区民総会を主体とし、区長及び評議委員を中心に運営が行われている。また、勝山区の中心メンバーが、地域農業を振興する組織の代表でもあることから、勝山区とそれぞれの組織の活動がお互いに意見を反映できる仕組みをつくることで、一体的に地域づくりに取り組んでいる。



写真1 勝山集落を取り巻く山々

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

ア 人口の減少と発想の転換

1956年(昭和31年)には437人の人口であった勝山集落も、仕事を求めて、名護市街地や沖縄本島の中南部地域に移住する住民が増えたことから、1985年(昭和60年)に136名まで減少した。こうした人口減少が続く中、その減少に歯止めをかけるべく、集落のリーダーや若い農業者を中心にムラ興し会を組織化し、集落をあげて農業で生活を維持していくためのビジョン作りが行われ、洋ラン等の新規作物の導入を図ったが、新しい品目の定着には至らなかった。

そこで、危機感をもったムラ興し会のメンバーは、地域にあるものを資源として活かしていく方向に発想を切り替え、その方法についてさらに検討を重ねた。

イ シークワサー・山羊・山の3つの宝で集落全体によるムラ興し

検討を重ねた結果、集落で昔から大切にされてきた、重要な換金作物であるシークワサー、集落の人々から愛されてきた山羊、集落を取り囲み近隣から多くの人々が訪れた山や自然に着目し、それらを活かすことによって、勝山集落の活性化を図っていくこととした。具体的には、シークワサー・山羊・山の「3つの宝でむらおこし」というスローガンを掲げるとともに、集落全体の取組が不可欠ということで時間をかけて集落全体の機運を盛上げていくこととなった。

① 勝山シークワサーの設立

2001年(平成13年)に「勝山シークワサー出荷組合」を結成し、酢の物用としての青切り果実の出荷を開始、また、委託によってシークワサージュースを製造するようになり、独自の味と香り、色を保持するための搾汁や保存の方法について研究開発が進められ、果実100%のジュースを完成させた。

その後、出荷組合を中心に2003年(平成15年)農業生産法人有限会社「勝山シークワサー」を立ち上げた。出荷組合は、発展解消の形で「勝山シークワサー」の生産部会として再編され、活動を継続している。

「勝山シークワサー」では、地元のシークワサーを使って高品質な製品が出荷できるよう加工場を設置するとともに、農家の再生産価格を保証するという信念のもとに、様々な商品を開発、加工し、また価格を安定させるために販売先を限定するなど戦略的な販売を展開している。

その結果、勝山シークワサーの商品は、沖縄県推奨の優良県産品に認定、3年連続モンドセレクション銀賞を受賞する等、数あるシークワサー加工品の中でもブランドとして広く認知され、県内外で好評を博しており、勝山地域の収益性の拡大に大きく貢献している。



写真2 加工品の検品

② 名護市勝山山羊生産組合の結成

生産農家で結成した「勝山山羊生産組合」、山羊料理をこよなく愛する近在の人で結成された「勝山山羊愛好会」が組織再編され、また、名護市内の山羊生産者をも含め、新たに2011年(平成23年)2月に「名護市勝山山羊生産組合」が設立された。

勝山集落を中心として名護市を挙げての山羊普及に発展しているほか、産業化に向け、肉の歩留まりの良い品種の導入、増産等に向けた積極的な検討が行われている。



写真3 名護市勝山山羊生産組合

③ 勝山つたえ隊の結成

地域の人たちが集まり「勝山のことを伝えたい」観光ガイドの団体「勝山つたえ隊」が2004年(平成16年)に結成された。

「勝山つたえ隊」では、昔、山から切り出した薪を運ぶために元々あった里道を活用し、努めて自然に手を加えない登山のコースとした。また、「勝山つたえ隊」では、分かりやすいトレッキングコース図や、山歩き・入山の心得などの資料を独自で作っており、初心者から熟練者まで使える4つのコース分けを行うとともに、入山者へ安全について

呼びかけを行うなどの活動を展開している。

さらに、地元が主催する「勝山シークワサー花香り祭」での活動や、学校、登山ショップからの依頼を受け、山々を案内する等の活動を行っている。



写真4 勝山つたえ隊

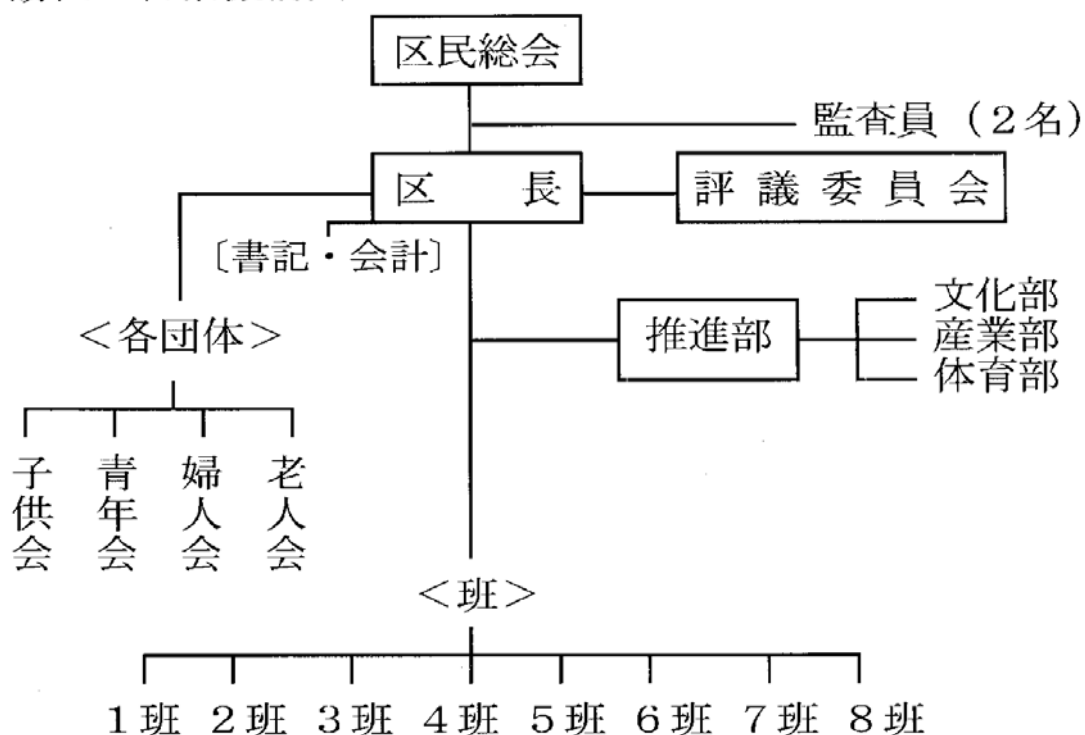
(2) むらづくりの推進体制

勝山集落の自治組織である勝山区の構成は、区民総会を主体とし、区の運営は、区長を中心とした評議委員会を中心に行われている。

区長が推進部、各団体、各班を総括しており、推進部には、文化部、産業部、体育部があり、各団体として老人会、婦人会、青年会、子供会がある。区内では、住民全体が1～8班に分かれており、お互いの合意形成のもとむらづくりの活動を行っている。

第2図 むらづくり推進体制図

勝山の自治機構図



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

勝山シークワサー社長、山羊生産組合長、勝山つたえ隊代表は、それぞれ勝山区の役員も務めていることから、集落内の農業を振興する団体のリーダーが中心となったむらづくりが行われ、勝山区とそれぞれの組織の活動がお互いに意見を反映できる仕組み

を作ること、一体的に地域づくりに取り組んでいる。

特に、集落を代表する取組である「勝山シークワサー花香祭」では、勝山シークワサー、名護市勝山山羊生産組合、勝山つたえ隊が中心となり、加工品の出店闘山羊（ヒージャーオーラサー）、新緑登山・散策コースなどのイベントを運営すると同時に集落全体の情報発信も行っている。



写真5 闘山羊

2. 農業生産面における特徴

(1) シークワサーを用いた6次産業化の取組

収益性が低く基幹的な作物とは成り得なかったシークワサーを、収穫期の最初の2ヶ月（8月～9月）は青切りして「酢の物用」に、次の2ヶ月半（10月～12月中旬）は果汁を絞ってジュース等の「加工用」に、最後の2ヶ月半（12月下旬～2月）は、完熟させて「果実用」として販売することで、地元で生産から加工、販売までの一貫体系を確立した。

特に、地元のシークワサーを使って高品質な製品が出荷できるように「勝山シークワサー」を中心に様々な商品を開発、加工、販売を行っている。このような勝山地区を中心とした生産拡大の取組や青切り、加工、熟果まで多様な商品化の業績が認められ、柑橘類では初めて2005年(平成17年)に県のシークワサー拠点産地の認定を受けている。

(2) 山羊の生産振興と産業化の取組

勝山における山羊の生産頭数は、近年飛躍的に増加している。山羊肉の需要は多いが、供給量としては不足しているといった現状があり、名護市勝山山羊生産組合の結成をきっかけとして、遊休地利用、草地造成、シークワサーの残渣を利用した飼料開発等の課題解決を図りながら、生産振興に取り組もうという意欲を見せている。

今後は、行政と連携し、産業化に向け生産量の多い新品種の導入等を図り、勝山産のブランド山羊の増産ができるように検討を進めている。

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) シークワサーを活用した子供達への食育活動

近隣の小学生が、シークワサー栽培の歴史や地域における役割などを学び、実際に集落から提供された苗を校内に定植して栽培を体験するほか、加工場見学収穫体験等総合学習の場としても活用されている。

また、これらの学習を通じて得た感動をもとに、応援歌「勝山シークワサーソング」が作られたり、小学校卒業記念登山が実施される等学校と地域の継続的な交流が行われている。

(2) 学事奨励会による子供達の健全育成

勝山は、山間へき地にかかわらず、明治の中頃から大正の初期にかけて「学校寺（がっこうじ）」という塾を開設し、遠く離れた那覇から教師を招き、昼は幼児を、夜間は一般の青年を対象に教育を実践したことで、多くの優秀な人材を輩出するようになるなど、教育には熱心な地域である。

学事奨励会は、1924年（大正13年）に始まり、現在まで続く行事であり、集落が一体となって子供達の健やかな成長を祝い、記念品の贈呈などを行うことで、長く地域で子供達の健全育成に対する重要な役割を果たしている。



写真6 シークワーサー収穫体験

(3) 環境美化活動の取組

集落全体の環境美化の一つに「道^{みち}ブ」という取組がある。「ブ」とは共同作業の意味で、道ブとは、道路等の共同清掃作業のことを意味している。基本的に、区民の義務として全員参加の形をとっており、年3回盆前、正月前、花香り祭りの前に道路の草刈り等を行っている。

(4) 字誌の編集

1978年（昭和53年）には、地元の人達が字誌「勝山誌」を編集、出版した。

この勝山誌は、江戸時代における集落の起源から、昭和に至るまでの出来事が詳細に記載されている。2005年（平成17年）には、あらためて戦後の歩んだ歴史、特産のシークワーサーや山羊で村おこしの現状を紹介する「ふんしどうくる勝山の里」を編集、発行した。これらの資料は、当集落にとって過去を知り、現在を知る貴重な記録となっている。